

座位保持装置の普及状況

茨城県立医療大学保健医療学部理学療法学科 宮崎 泰

はじめに

座位保持装置は身体適合面で優れ、自力座位が困難な心身障害児・者の座位保持を可能にし、日常生活を支援するための姿勢保持具として急速に普及してきています。しかしながら、座位保持装置は未だ開発途上にある福祉用具であって、材料や構造に様々な工夫・改良を加えながら身体障害児・者への適応を図っているのが現状です。これまで、座位保持装置に関連する調査を平成9年、平成12年、平成14年の計3回実施しました。今回は、これらの調査結果の概略と典型的な使用例を紹介します。

座位保持装置の現状

座位保持装置は平成2年度に公的給付が可能になってから、その年間交付決定件数は急増しています。身体障害者と身体障害児別に座位保持措置の交付決定件数をみますと、平成2年度では135件と1134件、平成13年では889件と4767件となっています（図1）（厚生労働省社会福祉行政業務報告より作製）。

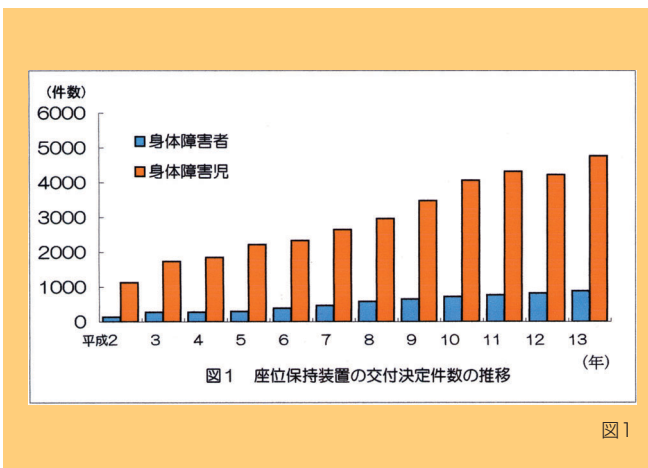


図1

身体障害者福祉法、厚生省告示第188号（平成12年3月31日改正）では、座位保持装置を普通型、リクライニング式普通型、モールド型、可変調節型に分類しています。木製いす、工房バギーなどは普通型に相当します。リクライニング式普通型では、座面と背シートの角度をある程度調節することが出来ます。モールド型とは特殊な採型器やギプスで採型して作製されたものです。可変調節型とは形や大きさのある程度調整可能なものです。どのタイプの座位保持装置を使

用するかは、障害の程度、使用目的、使用場所などによって異なります。

実施した調査から、座位保持装置のタイプの決定には、筋緊張の状態、変形・拘縮の程度、年齢などがかなり考慮されていることが推察されました。乳幼児や年少の就学児へのモールド型の処方は、少ないようでした。また、可変調節型の処方も少ない結果になっていました。

平成9年の調査では、車椅子95台中15台（16%）に座位保持具が取り付けられて使用されていました。平成12年の調査では座位保持装置36台中19台（53%）が車椅子やバギー等に取り付けられていました。これらの結果から、座位保持装置には良姿勢保持用の椅子の機能に加えて、移動用の福祉用具としての機能が求められていることが分かりました。

座位保持装置に関する両親の満足度に関する調査から、両親は「座ってられる」「身体に適合している」「座位姿勢がリラックスしている」などに満足し、「操作のし易さ」「簡便性」「小型化」「重さ」「成長に伴う調節機能」「発注から取得までの期間」などに不満があることが分かりました。

座位保持装置の身体への影響

座位保持装置を使用することによる身体機能への影響としては、変形・拘縮の進行防止、四肢体幹の強化、座位耐久性の向上、呼吸・摂食機能の円滑化などが挙げられます。次に、3台の座位保持装置を紹介します。

M.Y.さんは、脳性まひ混合型の18歳の女性です。左股関節脱臼と上側右凸・下側左凸の2重カーブの側彎を合併しています。側彎の進行防止と左側の股関節周辺部分での体重支持を軽減するために座位保持装置の座面や背面に凹凸をつくり、身体にうまく適合するような工夫がされています（写真1）。また、全身性の反りを抑制できるように座面と背シートの角度を通常よりも少なくしてあります。反りの強い時は、リクライニングにして反りを無理に抑制しないで済むようにしています（写真2）。



写真1

写真2

H.M.さんは、脳性麻痺の12歳の女兒です。痰や涎を上手に飲み込むことが出来ず、咽頭周辺からゴロゴロという喘鳴が聞こえます。全身性の強い反りがあります。やや前傾位で座位保持装置に座っている方が楽なようです（写真3）。この座位保持装置は、口腔に排出した痰を誤嚥しないように上体を更に前傾できるような振り子式の車椅子に取り付けられています（写真4）。

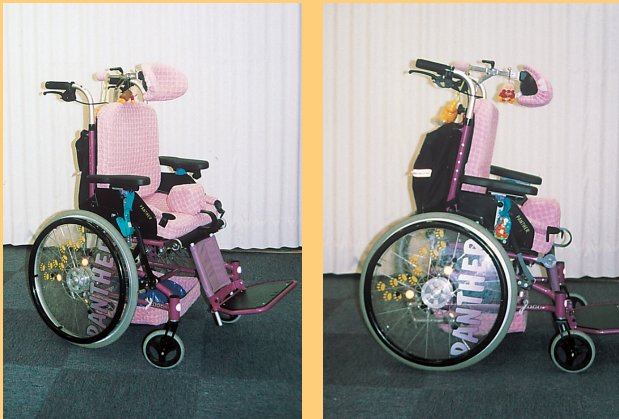


写真3

写真4

34歳のN.T.さんは、脳性まひではありませんが生まれたときから身体が不自由です。左凸の側彎があって、通常の車椅子では上体が右側に倒れてしまい座位を保持することが出来ません。N.T.さんの座位保持装置はウレタンを身体の形状に合わせて削り込んだものです（写真5、6）。

体調の影響もありますが、座位の方が臥位に比べ食事がし易いとのことでした。また、摂食・嚥下時の状態をビデオ嚥下造影（video-fluoroscopy ; VF）で検査したところ、座位での食事の方が臥位での食事よりも誤嚥が少ないという結果になっていました。N.T.さんは、通院やちょっとした外出には母親が運転するワゴン車で外出します。新調した座位保持装置の座面が厚かったために、ワゴン車の天井にN.T.さんの頭部が当たりそうになったので車椅子の車高を低くしたそうです。



写真5

写真6

3名の座位保持装置は、ほぼ毎日使用されています。平成14年に実施した調査では、使用頻度の多い座位保持装置への満足度や有用性は高いものでした。しかしながら、満足度や有用性が高くても、多くの不満もみられました。

おわりに

福祉用具の良し悪しは、福祉用具を日常生活の中でなくてはならないものとして活用出来るか否かにあります。完成度の高い座位保持装置を提供するために、製作者はもとよりリハビリテーション関連職種は、使用者の訴えをよく聞き入れ一層努力していくことが必要です。

最後に、本稿への写真掲載を快く同意して下さった皆様に感謝申し上げます。

参考文献

- 1) 柳迫康夫、原 康夫、芝田利生、松村伸次、大津慶子：重度脳性麻痺者に対する座位保持装置の工夫－発泡ポリウレタンを用いたナ－セントパケットシートの使用経験－リハ医学. 29 (8) : 623-628. 1992.
- 2) 日本整形外科学会・日本リハビリテーション医学会監修：四肢装具のチェックポイント第5版. 医学書院. 1998.
- 3) 宮崎 泰、大竹 朗、松村伸次、柳迫康夫：在宅重症心身障害児の座位保持装置に関する親の満足度. 日本重症心身障害学会誌. 26 : 27-33. 2001.
- 4) 宮崎 泰、真寿田三葉、松村伸次、柳迫康夫：心身障害児用車椅子の最近の動向. 茨城県立医療大学紀要. 4 : 20-25. 2001.